



田舎  
島

島の  
図鑑 仕事

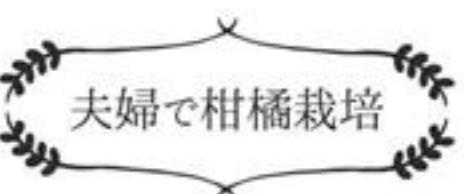
3

広島県 大崎上島

# 農業 01

文田秀也  
文田真弓

## 夫婦で農業をすることの魅力 それは「癒し」



毎日仕事をしていて楽しいと語る秀也さんと真弓さん夫婦。2人とも農家の生まれで、昔からこの仕事に馴染みがあった。会社員を退職し、UTーンして農業を始めた。今の働き方は自分たちのライフスタイルにとても合っていると言う。休みの日は、家の用事や子どもの行事がある時と決めている。秀也さんが心がけていることは、日々の仕事に一切の妥協をせず、やることは全部やるようになること。それだけ仕事に集中できる環境があるのは、一緒に働く真弓さんのおかげだと優しい表情を見せる。仕事が充実している秀也さんにとって「食べる」とは、幸せなことであり、食べるものを育てることが楽しくて仕方がない。その中でも、毎日の食後においしい果物のある生活は最高だと笑顔で語る。

果物農家の名人を目指す  
お気に入りの農具は噴霧器の先端「動噴」



# 農業 02

岩崎亜紀

## 家族でつくる新しい農家の力タチ

京都から家族とともに移住した亜紀さん。

家族でレモンやみかん、ブルーベリーなどを育てている。亜紀さんのところには、様々な商談が来る。商談では畠を視察してもらうが、育てているレモン畠を見せると、その商談成立は100%。畠のどこを見ても、自慢ができると言う。介護福祉士をしていた亜紀さんは農業をすることを決めたときに自然農法を学びに学校へ通つた。旦那さんが自慢の果物を育て、亜紀さんは学んだ知識を活かし、果物を加工して、ジャムやお菓子をつくるプロとして活躍している。「いつも新しいことを考えてみたい」と言う亜紀さん。これまで、みかん、ブルーベリー、ゆず、イチジクやキウイなども加工してきた。「これからはコラボが大切」と新商品の開発には余念がない。「あの人あんなんやりたいんやつて」と、いろんな人たちを巻き込む姿は、さながら、形のないものを形にするクリエイターのようだ。



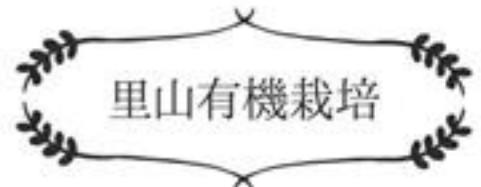
地元高校生と商品のパッケージづくりにも挑戦

いつも新しいことを考えてみたい

$$1 + 6\text{ 次産業} = \infty$$

# 農業 03

中原伸悟  
中原幸太悟



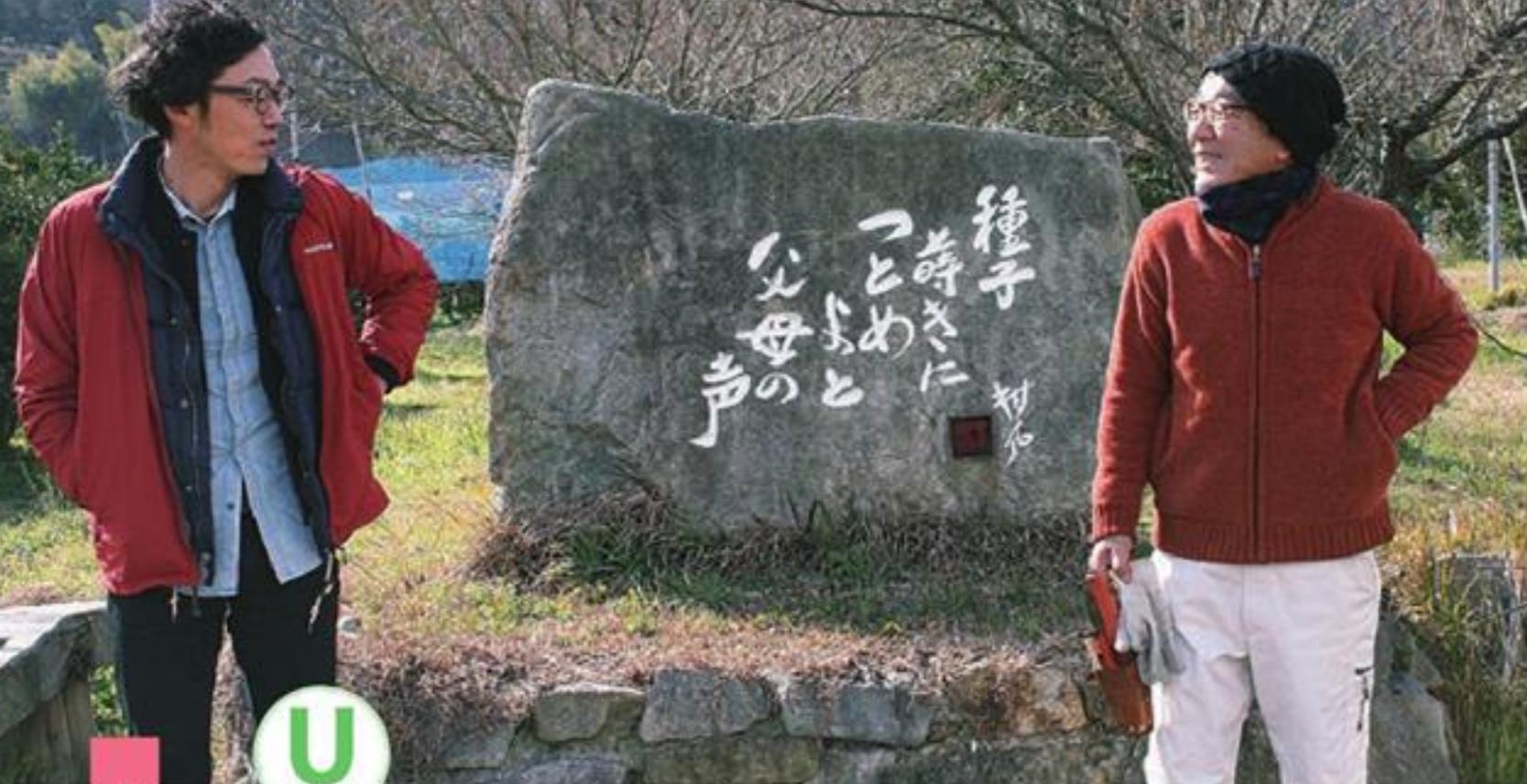
## 目指すライフスタイルを追求したら オーガニックになつた

「日本でも有数の好立地、柑橘を栽培するにあたりこれほどの適地はない」と語る父、伸悟さん。「人間が無理して大量につくつたものではなく、自然界にあるものを使って栽培したい」と言葉を続ける幸太さん。仕事のやりがいは親子口を揃えて「食べててくれた人の美味しいそうな表情や言葉」だという。過去には肥料を与えるすぎて一園地を全滅させたこともある。そんな失敗も今に至る重要な経験と語る。伸悟さんのお気に入りは乗用芝刈り機。マツダスタジアムより広い園地をさつそうと刈る。幸太さんはスイス製の剪定ばさみがお気に入り。3日に1度は親子喧嘩。その一方で、気兼ねなく相談できるのが親子の強みという。農家俳人、中村柑風先生の句碑の前で、里山らしい自然の園地を目指すと決意した。



大崎上島初、オーガニックオリーブオイルに挑戦中

身の丈農業を実践



# 農業 04

西田秀夫  
西田裕輝

## 親から子へ受け継ぐ 農業の夢と可能性

トマト農家の西田親子。息子の裕輝さんは、学校給食や地元の朝市などで、畑でとれたものを島の人たちに食べてもらうことが何より嬉しいと言う。仕事は気の持ちよう、自分次第で楽しくもつまらなくなる。父の秀夫さんは農家こそ情報を早く取り入れないといけないと言う。実際、ハウス栽培やメロンなどを島で初めて取り入れた先駆者でもある。みかん農家から野菜農家への転換はそれがきっかけだった。やりがいは一番ええものが出来た時。畑でそれたものを出荷せずにずっと眺めていたいと言う。畑を愛する秀夫さんが、その昔、息子の野球の試合を応援するために、きゅうりの栽培をやめて時間をつくつたこともある。畑の周りに年々広がる耕作放棄地をなんとかせんと、と危機感を強める裕輝さん。親から子へ受け継ぐ家業には「想い」が溢れている。



春は40種類以上の苗を育てる島の苗屋さん  
お気に入りの道具、それは自分の指



# 農業 05

横本正樹  
横本悠樹

春になつて、芽吹いて、花がなる  
季節と共ににある仕事

ブルーベリー開拓者



U  
ターン

おいしい物を食べると心が優しくなる  
毎月収穫するものがあるから毎月の喜びがある



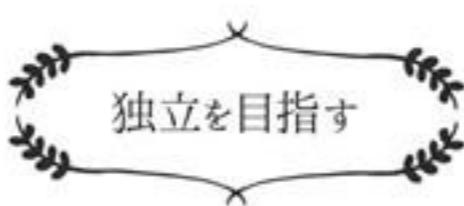
父、正樹さんが40年前に始めたブルーベリー栽培。西日本の先進地としてこの島で始まり、今では多くの農家が栽培をしている。冬場に出荷のピークを迎える柑橘農家にとって、夏場に出荷できるブルーベリーはとても重宝されるようになつた。実際、息子の悠樹さんも夏はブルーベリー、冬は柑橘の収穫をしている。正樹さんから農事組合法人を受け継ぎ、これから農業を考える悠樹さん。農業は自然が相手であり、成果は自分次第というところに悠樹さんは魅力を感じている。収穫は1年に1度、その年の天候等によって毎年違う結果となる。決まった正解がないといふ厳しさはあるが、それ以上に人間の基礎となる「食」に携わることができるやりがいのある仕事だと教えてくれた。島の自慢のブルーベリーは目に良いとされるアントシアニン含有量が日本一。仕事に誇りを持つその表情は力強い。

## 農業

06

榎本一史

# 若きリーダーがつくりあげる 信頼のトマト



「おいしかったよ」の一言が一番嬉しい

社長の若き右腕

一史さんのつくるトマトは、大手ファーストフードやコンビニでも使用されている。大手チェーンも信頼する自慢のトマト。一史さんは、島へUターンし、農業を主体とする株式会社へ就職。学生時代のアルバイトがきっかけだったと言う。弱冠25歳で若い世代のリーダーとして現場を任せている一史さん。作業の手順に対して、なぜやるのか、どうしてこの作業が必要なのかを必ず説明している。そんな丁寧な仕事ぶりが評価されている。島の好きなところは人情が厚いところ。島の一体感がたまらなく好きだという。どこかのスーパーに入つてもトマトとみかんを自然と手にとつたり、見知らぬ土地でハウスの中を覗いたりしてしまって言う。どこに居ても学ぶことを忘れない。将来は独立して、自分の理想とする農業を追求したいと熱く語る。

# 農業 07

齋藤健司  
齋藤燕希

はじめての農業  
自分たちで決めるから楽しい

夫婦でトマトときゅうり



I  
ターン

好きな時間は晴れた日の休憩時間  
家族で楽しめることが一番大切

農業を始めたきっかけは「何かを自分でやりたかった」からと話す健司さん。何が正解かわからないが「全て自分で決める」ことができる農業は面白いと語る。ハウス栽培でトマトときゅうりを丁寧に育てている。島へ移住して1年目に家が見つかり、借りられるハウスもすぐに見つかり、とてもタイミングが良かつた。島での良い出会いが農業を始めるための後押しになつたと言う。燕希さんは、観光ガイドやホテル職員をしていた。島に来て初めて農業にチャレンジしたと言うが、野菜を育てることは面白いと話す。「家族みんなで仕事が出来る」のは農業の大きな魅力だと感じている。夫婦で農業をする健司さんと燕希さん。将来的に二人が挑戦したいことは、農業体験ができるゲストハウスをつくること。良い出会いが農業を形づくる。夢は膨らむばかり。

# 農業 08 朝山裕児

## 農業の厳しさを知る造園職人

兼業農家

裕児さんの本業は、庭木の剪定をする造園業。祖父の代からの家業である。はじめは島に戻る気持ちはなかったが、いつの間にか家業を継いで早15年。造園業は冬に仕事が少ないとため、その時期に収入があればと思い、5年ほど前に農業を始め、主に紅八朔をつくっている。兼業をはじめた裕児さんに農業のことを聞くと「農業はそんなに甘くはなく、赤字になつたことも」と厳しい表情を見せた。そして同時に「とても面白い」と語る。今後はレモン畑を増やしていきたいと意欲を見せてくれた。農業は子育てのように成長していく畑の姿が面白いと言う。楽しいから作る、それも大切だが、長く続けるためには、楽しさだけではなく収入も考えることが重要。厳しいながらも面白い、それが農業だと語る。



農業は子育てに似ている  
紅八朔の次はレモン



# 農業 09

成定 裕司

## 農家と接する中で 農業をはじめた営農指導員



農家に栽培技術や市場情報を伝える仕事をしている裕司さん。主にトマトやきゅうりといつた施設野菜の情報を提供している。農家にとって、栽培ノウハウや市場動向はとても重要である。

裕司さんは、進学のため一旦島を離れ、卒業と同時にUターン。指導員として働く傍ら、畠を借りて農業をしている。農家の仕事ぶりに刺激され、柑橘を育てている他に、県内で唯一ハウスでミョウガをつくっている農家としての顔も持つようになった。仕事のこだわりは、農家の立場になって意見を述べること。自分自身の思い込みだけの意見に終始しないように心がけていると言う。週末だけではなく、平日の朝晩も畠に行くほど畠仕事に精を出す毎日。「畠はやつたら返ってくる。やればやるほどえもんができる」と笑顔で語る。



お気に入りの道具はハウスを修理するための、  
インパクトドライバーとサビ落としのKURE 555

# 農業 10 小池信忠

自然が相手の仕事  
成果が目に見えてわかりやすい



お気に入りの農具はスイス製の剪定ばさみ

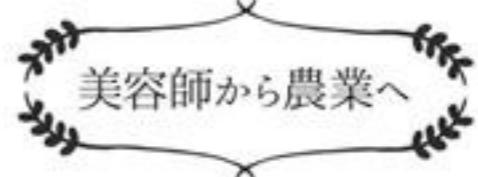
スカイブルーの軽トラがトレードマーク

自然が相手の仕事だからこそ、やつたらやつた分、目に見えて成果につながるところが農業の魅力。農業が思い切りできる環境と、親切な島の人たちとの暮らしに惹かれて移住したと言う信忠さん。来島1年目は選果場の作業員として働きながら、農業の基本を学んだ。その仕事を通じて出会った畠を引き受け農家となつた。自分で仕事の量や時間を決めることがができることが信忠さんのライフスタイルに合っていると言う。畠ではみかんとレモンに力を入れている。その他にも10種類ほどの柑橘を育てている信忠さんが、みかん好きの人々に伝えたいおいしいみかんの見分け方。ヘタの部分が緑から黄色に色が変わつていれば食べごろ。「みんなに一番おいしい時にみかんを食べてほしい」と笑顔で語る。

# 農業 11

岡田 明仁

こころが動いたのは  
しいたけづくりだった。



炭火焼のしいたけに醤油をたらして食べると絶品  
しいたけづくりがなければUターンしていなかつた



島にUターンした明仁さん。以前、島でしいたけづくりの仕事に就いたことがきっかけだった。都心で美容師をしていた明仁さんは、美容師として独立開業に悩んだが、結婚して家族ができたとき、もう一度農業に心が動いたのは自然な流れだった。職場では、中国やベトナムから来ている実習生の人たちとも一緒に働いている。言葉や文化の違いがあり、仕事の仕方を伝えるのは一筋縄ではいかないが、大切なのは仕事に取り組む姿勢。自分の働く姿を見てもらいながら日々の仕事に取り組んでいふと言う。ハウスでのしいたけづくりは毎日の湿度と温度管理が重要。今やるべきことを常に考え、手間をかけて、おいしいものを作ることが仕事のやりがい。そんな姿勢に会社は大きな期待をしている。

島にUターンした明仁さん。以前、島でしいたけづくりの仕事に就いたことがきっかけだった。都心で美容師をしていた明仁さんは、美容師として独立開業に悩んだが、結婚して家族ができたとき、もう一度農業に心が動いたのは自然な流れだった。

# 農業 12

光野 郁江

自分で食べるものは  
自分でつくる

憧れの半農半Xの暮らしを島で実践している郁江さん。都心で働いていた郁江さんは、効率だけが求められる働き方と暮らし方に疑問を抱いた。食べるものは自分で作りたい、そこに暮らしの重きを置きたいと考え、農のある生活を求め島への移住を決めた。月の半分は福祉関係の仕事に就き、残りの半分は畑を耕し農業を行っている。こだわりは自然農法。たくさん作らなくても良いから、その分、作物を育てることに対して手間隙をかける。季節の野菜はもちろん、小麦や大豆など、まわりの人があまり作らないものも一緒に育てている。パンが好きという理由もあるが、島のおすそわけ文化では、他の人が作らない作物を育てていると、ご近所さんからも喜ばれて嬉しいと言う。作物を育てながら、自然と向き合い、目の前のこと集中できる島の環境は、とても居心地が良いと語る。



軍手、長靴、鍬があれば何でもできる  
地球と呼吸を合わせる生活を目指す

若手を見守る匠 takumi

河田忠宏

今しんどいと思うことは  
将来必ず役に立つ



レモンの  
匠



若手農家のアニキ的存在

釣りに行きたい時が休みの日

若手を見守る匠 takumi

松岡清士

# 農業のおもしろさは「自由」



柑橘農家  
トレーナー

ものを育てることが好きなら農業はできる。農業が好きな島で自由にはじめてみたらいいと笑顔で語る清士さん。専

仕事をしていて毎日が楽しいと語る忠宏さんは、若手の育成に力を入れるベテラン農家。明るく面倒見が良い性格のため、若手農家から頼られるアニキ的な存在。島にはたくさんの教え子となる農家がいる。自慢のレモンは広島県を代表する菓子の原材料にもなっている。「農業は、手をかけてやつた分だけ成果が出る。最後はいつも自分との戦いだ」と語る。その言葉には、絶対においしいものを作るという強いこだわりを感じられる。農業は誰にでも誇れる自慢の仕事。一生懸命働いた分、趣味の釣りがとことん楽しく、飲む酒が旨いと、仕事と趣味の両方を充実させている姿を若手に見せてくれている。

業農家に生まれ、高校は農業学校に進学。卒業後は農業の仕事に就いた。

みかんの価格が暴落した頃、農業を離れ左官職人となつたが、再び農業の道に戻ってきた。あれから20年。

やはり農業が好きだと語る。UIター

ンの若手農家グループの指導役を担う清士さんは、若い人たちと一緒にやっていると自分も負けずに良いものを作りたくなると語る。負けず嫌いなところは職人気質。若手の指導にも力が入る。



若手を見守る  
丘

takumi  
金原邦也  
金原英香

## 揺るぎない柑橘への情熱 次世代に引き継ぐ「技」

柑橘専業  
55年



実家が農家で、家族のため地域のためにと、みかんの指導員になるべく高校は農業高校へ進学。指導員として広島果実連に40年勤務したあと島へUターンした。英香さんとは指導員時代に結婚。夫婦の良いところは、言わなくとも伝わる気兼ねのなさと笑いながら語る。農業に携わって55年。指導員時代、台風による産地の危機的状況に善処した功績や、国から農業政策についてのヒアリング、大学からの表彰など数々の実績がある。今なお消費者のニーズに対して新しい商品開発を取り組み続けている。後継者育成に力を入れ、これまで培ってきた「技術」を若い世代に引き継ぐことが自分の使命だと語る。

農業の技術を次世代へ

# 農家人生スゴロク

のうかじんせい



大崎上島町商工会 〒725-0301 広島県豊田郡大崎上島町中野 4098-4  
TEL 0846-64-3505 FAX 0846-64-3552 kamijima-ohsaki@hint.or.jp  
大崎上島観光ナビをチェック! osakikamijima-kanko.jp

取材／大崎海星高校生 有志12名 取材協力／大崎上島地元協力者